

リハビリテーション科 ことばを「聞く力」「話す力」の発達

言語聴覚士 高田 直人

人と人が、社会の中で意思・感情・自分の考えたこと等を伝え合うことを「コミュニケーション」といいます。コミュニケーションの手段としては、まずことばがあります。ことばを使うことで私たちは普段何気なく友達と会話を楽しんだり、家族と今日あったことを伝えあったりしていますが、コミュニケーションにはことば以外の手段もあります。ことば以外の手段としては表情、声の強弱、身ぶりといったものがあります。ことばだけではなく表情（喜んでいるかな？嫌がっているかな？）などからも相手の意思や気持ちを考えながら人とコミュニケーションをとっています。

コミュニケーション手段は色々ありますが今回はことばについてお話をしたいと思います。ことばには「聞く力」と「話す力」があります。

まずはことばを聞く力についてです。

こどもがいつからことばを聞くことができるのか、この答えは生まれて間もない新生児期からことばというものを好んで聞いていると考えられています。生後2～7日の新生児が母親の語りかけを聞くことで脳の反応がより見られたり、母国語と外国語を聞いた時の赤ちゃんの反応を比べた時には、母国語の方をより好んで聞いているといわれています。また、新生児期の赤ちゃんはあらゆることばの音を聞き分ける力が備わっていると言われていいます。世界中には、600の子音と200の母音があるとされています。この音の違いを新生児は区別できると考えられています。音の違いが分かる時期から次第に母国語に必要な音のみを知覚するようになっていきます。そして生後6ヶ月くらいになってくると音だけで



はなく、生活環境の中でなじみのあることばを学習するようになってきます。生後6ヶ月の赤ちゃんは、自分の名前を呼ばれると振り向くようになります。この時期になると、少しずつですが周りで話されることばのニュアンスがわかるようになってきます。ただ、違う名前でも振り向いてしまうことがある等、まだまだことばを理解するという点においては不確かな時期です。そして1歳6ヶ月くらいになると、理解できることばは飛躍的に増えていきます。この時期になると、簡単なことばの指示を聞いて理解できたり、言われたことばを理解して指差してアピールしたりといったこともできるようになってきます。



次はことばを話す力の発達についてです。

まず誕生直後はことばとしての意味をもたない泣き声等の初期の発声が聞かれます。次いで生後2ヶ月～3ヶ月になると泣き声だけではなく、「クーイング」と呼ばれる喉の奥でクーとなるような音が聞かれるようになります。そして、「あーうー」などの母音に似た発声をするようになります。次に5、6ヶ月になると「ばばば…」「ままま…」などの子音と母音を含んだ発声をするようになります。これを「喃語」と言ったりします。この時期はまだことばとしては聞き取れませんが、出せる音を使って何かを伝えているかのように見えたり、発声を楽しんでいるように見えることもあります。

そして個人差はありますが1歳頃になるとことばが出てくるようになり、1歳6ヶ月になると急激に話せる言葉が増えてくる時期がやってきます。このことを語彙爆発の時期と言ったりもします。



療養介護・医療型障害児入所施設 各棟取り組み紹介⑦

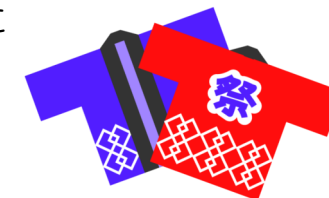
たんぽぽ西棟

毎年恒例の秋祭りを行いました！！

たんぽぽ西棟では、毎年9月に秋祭りを行っています。今年の秋祭りは「おみこしわっしょい」と「縁日体験」でした。地域のお祭りに行く機会のない人が多いため、お祭りの雰囲気味わってもらおうと、スタッフがおみこしを作成しました。オープニングにおみこしが登場し、利用者さんの近くを「わっしょい、わっしょい」と回ると、いっきに病棟がお祭りの雰囲気に！！

「縁日体験」では射的と綿菓子作りをしました。射的ゲームでは、車椅子からでも飛ばしやすいように考え、手作りした射的セットで缶の的を狙いました。綿菓子作りでは、利用者さんに綿菓子を作ってもらったり、作る様子を近くで見てもらいました。縁日ブースを待っている間には和太鼓隊が利用者さんを順に回り、スタッフと一緒に太鼓を叩いて、お祭りの雰囲気を更に盛り上げていました！！

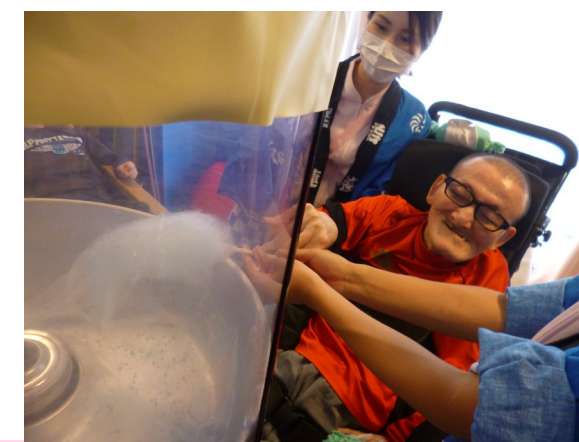
最後に作った綿菓子をみんなで食べて大満足の秋祭りでした！



「おみこしわっしょい」
法被姿の職員と利用者さん 笑顔が素敵！！



スタッフ手作りの射的
「未来はこれから変えることができるんだ！」



本格的！わたがしづくり
ふわふわでおいしい！

どんぐり園入園受付・ おひさま教室（体験教室）のご案内

医療型児童発達支援センター どんぐり園は就学前の肢体不自由・重症心身障害のお子さんが親御さんと一緒に通園する施設です。医療・リハビリテーション・保育など総合的な療育を行っています。どんぐり園では令和2年度の入園申し込みを受け付けています。

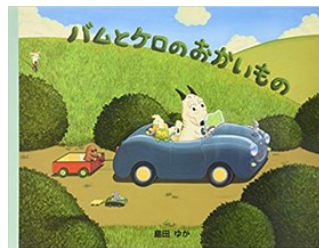
- ☆つくしクラス（未満児：概ね2歳から～） 週3日
- ☆たけのこクラス（年少児） 週5日
- ☆そらまめクラス（年中・年長児） 週5日
- ★年間行事：遠足（春・秋）・プール療育・家族参観 等
- ★個々のお子さんに応じた給食提供（6段階）をしています。

入園前のおひさま教室（体験教室）も行っています。
お母さん、お父さん、子育てについて一緒にお話しませんか。
まずはお気軽にお電話をください。

＜お問い合わせ先＞ どんぐり園
電話 052-501-4079（内線274）



読書コーナー



「バムとケロのおかいもの」 島田ゆか 作/絵

「バムとケロのおかいもの」は、一緒に暮らす犬のバムとカエルのケロちゃんが市場へ月に一度のおかいものに出かけるお話です。

市場では、ケロちゃんの破れたチョコキの生地を「きじやさん」で買うところから始まり、売り物の野菜をかじりまくるうさぎの「やおやさん」、不思議な「ハムスターのお店」、市場でお食事、「ゆかいなとびら」「こっとうやさん」と買い物を楽しむ様子が描かれています。

こども向けの絵本ですが、主人公のバムとケロちゃん表情が何とも言えず、大人が見ても思わず笑顔がこぼれる、ほのほのストーリーになっています。バムとケロ以外の登場人物も多彩で各々に個性があって、主人公以外のキャラクターのところでも話が進んでいたりするのがまた面白くもあり楽しいです。

絵本を読むだけでなく、絵の中を「じーっ」と観察して、細かなストーリーをこどもと一緒に発見することもとても楽しいです。

色々な発見もあり、かわいい絵を見ているだけでとてもわくわくする絵本です。ぜひおすすめしたい一冊です。

（看護師 鈴木）



どんぐり園 11月の作品紹介

語彙爆発の時期の前までは、1日におよそ0.18語、ひと月に5～6語程度のことばを理解していくと考えられており、語彙の爆発期以降には1日に平均0.84語、ひと月に平均24.3語という驚きのスピードで語彙を習得していくとされています。そしてことばが増えてくると、言葉を2つつなげて2語文が話せるようになり、2歳6ヶ月くらいになると3語文が聞かれるようになってきます。

ことばは急に増えてくるわけではなく、クーイングといった発声から始まって、喃語と呼ばれる子音と母音の組み合わせを言えるようになるなど発達段階があります。

ことばの発達について簡単に説明してきましたが発達には個人差があります。「〇ヶ月で、〇歳から」といった表現をしてきましたが、これはおおよその目安になります。数字にとらわれすぎてしまわないようにしてください。

先にお話ししたように、コミュニケーションはことばだけではありません。相手の気持ちや、感情を理解するのは表情や声のトーンなどことば以外の情報からもたくさん理解することができます。ことばが出ないからといって相手とコミュニケーションを取れないというわけではありません。

ことばが出ていなくても、相手と関われる楽しさを感じていく経験を積み重ねていくことは、他者とのやりとりの基礎になります。その基礎の上にことばが乗ってくると、会話を楽しむことができるようになります。

ことばが出ていない時期においても人と関われる楽しさをたくさん感じられる環境を作っていくことが大切になると思います。



たけのこクラス・つくしクラスの作品



そらまめクラスの作品



きのこがいっぱい！！

障害児等療育支援事業

地域療育研修会を開催しました。(報告)

第2回・第3回

地域療育研修会

● 「小児科整形外科外来

～外来でよくある相談事について～

リハビリテーション部長 萩野 精太

- ・先天性股関節脱臼
- ・O脚・ビタミン欠乏性くる病
- ・うちわ歩行(内股歩き)
- ・よく転ぶ 原因は？
 - ・整形的な問題がある？
(外反扁平足・関節のやわらかさ)
 - ・バランスがわるい？
 - ・体の使い方が苦手？
 - ・注意散漫なのか？
 - ・経験不足？
 - ・発達性協調運動障害？
 - ・自閉症スペクトラム・ADHD？
- ・障がい児の側彎
 - ・原疾患
 - ・側彎の問題点
 - ・治療について(装具療法・手術)
- ・猿腕・関節のやわらかさについて

萩野医師より「小児整形外科外来でよくある相談事」についてというテーマで、乳幼児期の支援に携わる先生方にとって身近な話題から専門的な内容まで、写真や動画を用いながらわかりやすく説明がありました。

「くる病や股関節脱臼については保健センターの健診等では聞いたことがあったが研修をきいてよく理解できた」「保育園には転びやすかったり、走り方の気になるお子さんがいるので参考になった」という感想がありました。また、在宅リハビリや二分脊椎のお子さんの痛みへの対策についての質問がありました。

● 「障がい児の感覚特性の理解と支援」

作業療法士 廣瀬 美緒

- ・作業療法(士)とは
- ・遊びたいのに遊べない
- ・発達障害児にみられる感覚の問題
- ・感覚統合理論
 - ・視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚・前庭覚・固有受容覚について
 - ・感覚統合の発達について
 - ・行為機能障害・感覚調整障害
 - ・感覚処理
 - ・低反応・感覚探究・過反応への対応
- ・肢体不自由児の感覚調整障害
 - 感覚統合理論の考え方をいかして
- ・適応反応

廣瀬作業療法士より障害児の感覚特性の理解と支援というテーマでお話をしました。発達障がいや脳性麻痺の当事者の自伝や保育園などでよくある事例をまじえ、お子さんの感覚について様々な角度から具体的にわかりやすい説明がありました。

廣瀬先生がまとめとして「困った行動や不思議な行動にはきっと理由があります。その理由を理解するためには『感覚』はひとつの手がかりになります。感覚の好き嫌いがわかるともっと仲良くなれるかもしれません。いつも同じではなく情動や体調に左右されたり、注意の向け方の凹凸もあります。無理に慣れさせようとするより心地のよい環境を提供したり、能動的な関わりができるようなサポートを大切にできないかなと思っています。」と話されました。研修終了後には「重症心身障害のお子さんの感覚飽和状態について、心地良さなのか、回避なのかをどのように判断すればよいのか」という質問がありました。「子どもたちのもつ感覚特性について、意識しながら支援する大切さを再認識できた」という感想も聞かれました。

● 「コミュニケーションの発達と自閉症スペクトラム障害」

言語聴覚士 高田 直人

- ・コミュニケーションの発達
- ・ことばを聞く力・ことはを話す力
- ・発話知覚
- ・自閉症スペクトラム障害の児の発話知覚
- ・青い鳥医療センター言語療法でのコミュニケーション支援(前言語期)

高田言語聴覚士より「コミュニケーションの発達と自閉症スペクトラム障害」というテーマでお話がありました。

発話知覚(発話の口の動き(視覚情報)と音声(聴覚情報)を統合して知覚処理をする力)について、その根拠となるマガーク効果について動画を用いて説明があると、会場が「ほー」「おー」といったど声で包まれました。

ASD児は聴覚情報と視覚情報を統合することが難しく、バラバラに入力される刺激をまとめあげることが困難になり、そのことが言葉の発達やコミュニケーションの発達に影響を与えるという説明がありました。ASD児のことばを人との関わりの中でどう育てるか。その説明として、青い鳥での前言語期のコミュニケーション支援について実際のSTのセラピー場面も動画で紹介がありました。こどもの遊びに寄り添い、強制をしない、大人の都合で遊びが中断されないというなかで警戒心が減り、安心感が持てるようになる。共感的(非要求的)な声かけが他者への注意を向けるという力を発達させる。

こどもが車を動かしたら、大人も同じように車を動かす。こどもが積み木を積んだら、大人も同じように積み木を積む(逆模倣)。そのような関わりの中でASD児が自発的に大人に近づこうとする、笑いかけるなど人への注意が増えていくとお話がありました。

講演後、「支援者は『楽しんでほしい!』『いろいろな経験を積んでほしい』という願いから遊びを提案したり、指し示すことも多くなる。講演を聞きながらこどもの発達段階にあった支援、関わり方をみつめなおす機会となった」といった感想が届きました。



● 「てんかんの発作と介助」

小児科医師 平岩 文子

- ・てんかん・てんかんの診断について
- ・てんかん発作の種類・分類
- ・てんかんの病因・治療方法
- ・鑑別が必要な運動・精神症状
- ・けいれん重積
- ・自閉症スペクトラムとてんかん

保育園や幼稚園、学校・親子通園・事業所等では、てんかんのあるお子さんに出会う機会は多いと思います。てんかん協会製作の動画などをみながら発作時の声掛けや対応、坐薬の挿入法についてなど具体的に学べる内容でした。

事前の質問もいくつかあり、講演後には出席者のみなさんが熱心に先生に質問をされる姿がありました。てんかんは身近な疾患ですが、症状はさまざまであり、支援者のみなさんご家族から聞き取った対応方法にあわせて対応していくこととなると思います。てんかんについての講演は数年ぶりの開催でしたが関心の高さがうかがえました。

インシデント研修会(全3回)

今年度は5市町村6名の親子通園職員の参加がありました。当センターどんぐり園職員、地域療育のスタッフとともに通園施設の日々の療育の中の一場面をきりとり、丁寧な検討を行いました。専門的な立場として言語聴覚士も参加しました。インシデント研修では共に学びあう空間の中で参加者全員が主体的に参加します。経験年数や立場に関係なく、自分自身でしっかりと事例のお子さんの情報収集をしながら、こどもの姿や事柄の背景・状況を捉えながら、考えをまとめていきます。そして最後に「わたしならこうする!」を発表します。

今年の研修では「もう一度事例提供をしてみたい!」という先生がみえました。また研修後に職場で報告会をしたり、自宅などで引き続き考えたりしながら、数日後に自分なりの答えをみつけられたという先生もみえました。3回コースなので他市町村の先生との交流の場にもなっています。次年度も開催を予定しています。定員のある研修になりますが、ぜひご参加ください。

(地域療育担当)